読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布

酒井雅史

1. はじめに

現代日本語ではアル・イル・オルの 3 形式の存在動詞が用いられる。この存在動詞の方言分布は，東＝イル : 西＝オルといった東西対立の分布を成す。ただし，各地域でイルとオルのどちらかまたは，アル・イル・オルのいずれか 1 形式しか用いられないというわけではもちろんなく，2 形式ないし 3 形式が併用されている。ところが，東西対立の指摘以降，これまでの存在動詞を扱った先行研究では，分布と国語史との関連について言及しているもの（金水 2006・小林 2004・迫野 1998），もしくは東北方言イタとイタッタの相違について述べた竹田（2020）のように，限られた方言の詳細な記述が行われているのみで，どのような併用状況にあるのかを巨視的に把握しようとした研究は管見の限り見当たらない。

そこで，本稿では試みの一つとして，『読みがたり各県のむかし話』（以下，『むかし話』資料。資料の詳細については 3 節にて後述。）をもとに，存在動詞の使用状況の一端を探る。

以下，2 節で存在動詞の分布について触れたのち，3 節で『むかし話』資料について述べる。そして，4 節で『むかし話』資料に現れた存在動詞のうち肯定文について 5 節で否定文についてそれぞれ出現状況をみる。6 節はまとめである。

2. 存在動詞の方言分布

先に触れたように存在動詞の方言分布は東西対立型の分布となることでよく知られる。全国的には，富山県・岐阜県・愛知県の東境を境界として，東にイルが西にオルが分布し，福井県嶺北地方・滋賀・京都・大阪にイルが，和歌山中南部と三重南端・八丈島にアルが言語の島的に分布するといった分布である（図 1）。

全国的な分布は以上のようにまとめられるが，金水（2006）が述べるような「近畿中央部およびその周辺においては，「ある」「いる」「おる」三形式の歴史的なせめぎ合いの中でそれぞれの道を選び取り，さらに動揺が継続している（金水 2006 : 263）」状況は各方言によってその様相が異なることが予想される。

3. 分析データ

本稿で分析に用いる『むかし話』資料は，1973～1978 年に刊行された『各県のむかし話』の改訂版として 2004～2006 年に刊行されたものである。『むかし話』資料は，各地に伝わる伝承や伝説を語ったものを再録した資料である。他の昔話を収めた資料と比べて，各府県内での地域的な偏りが出ないように万遍なく昔話が集められており，地理的

連続性を見るうえで有用なものである。また，編集の段階で地域の人をはじめ教育委員会等多くの人間が関わり，各地の方言らしさが損なわれないよう編纂されている。以上の特徴を持つ『むかし話』資料は，各県およそ同じ分量の話が収められており（40～70話；60,000～80,000 字程度），地域特有の話とともに，都府県間で共通する話も収められている。

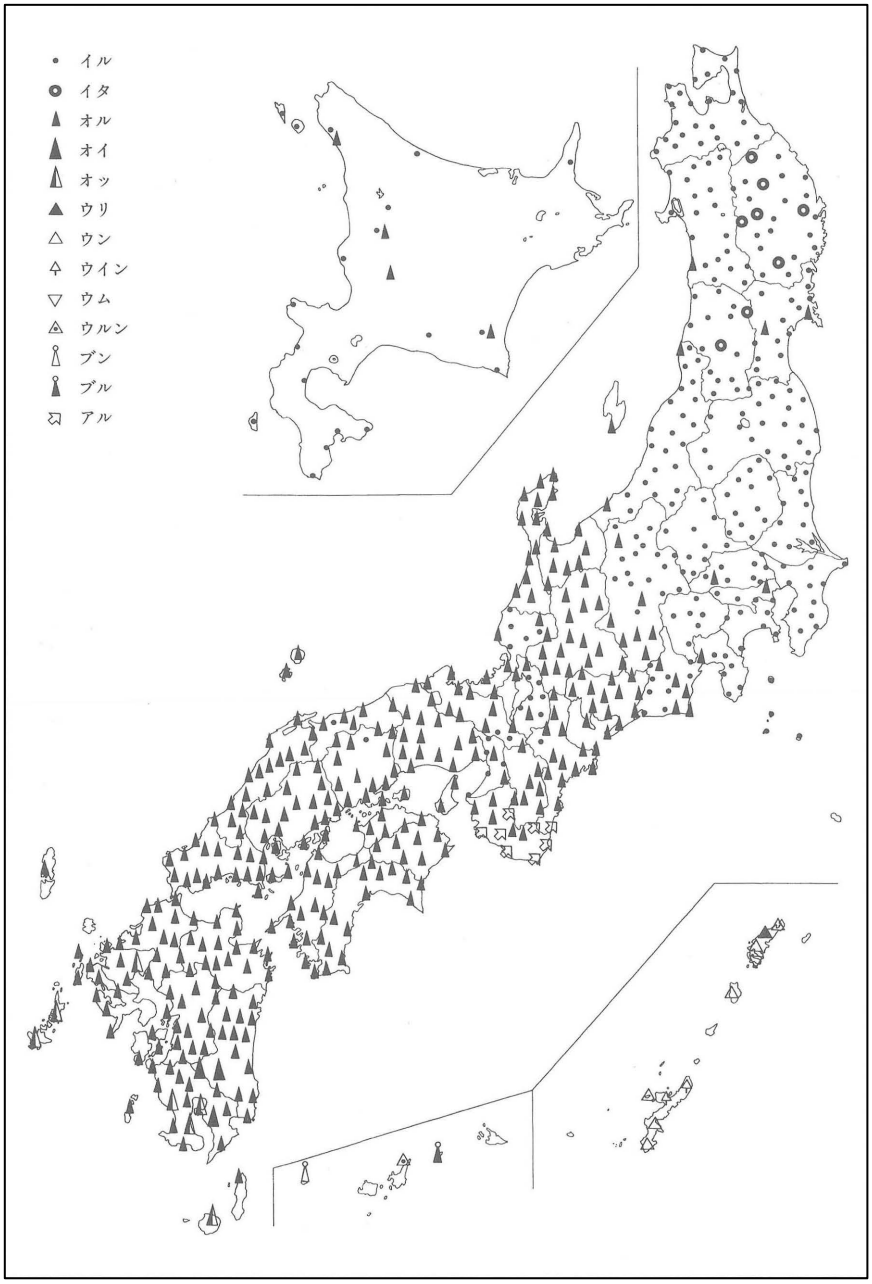

図 1　存在動詞の方言分布（佐藤 2002：115）

なお,『むかし話』資料を用いた研究には，文末表現の地理的分布を扱った日高（2013・2018）や，大阪方言のノダ相当形式ネン・テンの成立を検討した野間（2014），関西方言の素材待遇形式の分布について述べている酒井（2019）などがある。

本稿では,『むかし話』資料のうち北海道・沖縄県を除く 45 都府県を対象に調査・分析を行なった ）。分析の対象となったデータの分量は，表 1 の通りである[1)]。

表１　分析対象とした分量

都府県	地域	話数
青森	津軽	30
	南部	16
	計	46
岩手	北部	7
	中部	22
	沿岸	4
	南部	12
	計	45
宮城	北部	39
	南部	19
	計	58
秋田	北部	8
	中央	16
	南部	10
	由利本荘	7
	計	41
山形	最上	13
	庄内	11
	村上	13
	置賜	11
	計	48
福島	会津	15
	中通り	29
	浜通り	13
	計	57
茨城	計	37
栃木	東部	18
	中部	16
	西部	30
	計	64
群馬	北・西部	30
	中部	26
	計	56
埼玉	計	37
千葉	下総	24
	安房・上総	31
	計	55
東京	計	47
神奈川	北部	54
	南部	19
	計	73

都府県	地域	話数
新潟	北越	12
	中越	21
	西越	9
	計	42
富山	呉東	29
	呉西	32
	五箇山	6
	計	67
石川	能登	22
	加賀	20
	計	42
福井	嶺北	52
	嶺南	22
	計	74
山梨	東部	7
	西部	42
	計	49
長野	北信	20
	東信	6
	中信	10
	南信	10
	計	46
岐阜	飛騨	19
	美濃	43
	計	62
静岡	東部	14
	中部	18
	西部	25
	計	57
愛知	三河	20
	尾張	31
	計	51
三重	伊勢	36
	伊賀	6
	志摩	9
	牟婁	12
	計	59

都府県	地域	話数
滋賀	湖北	20
	湖東	15
	湖西	14
	湖南	16
	計	65
京都	京・山城	16
	丹波	10
	丹後	18
	計	44
大阪	大阪市・摂津	16
	河内	23
	泉北・泉南	20
	計	59
奈良	北和	29
	南和	31
	計	60
兵庫	但馬	13
	播磨	18
	丹波	6
	阪神神戸	9
	淡路島	8
	計	54
和歌山	紀北	16
	紀中	31
	紀南	18
	計	65
鳥取	因幡	22
	東伯耆	21
	西伯耆	19
	計	62
島根	出雲	25
	石見	16
	隠岐	8
	計	49
岡山	備前	12
	備中	20
	美作	5
	計	37
広島	備後	18
	安芸	29
	計	47
山口	周防	22
	長門	19
	計	41

都府県	地域	話数
徳島	北東部	30
	西部	9
	南部	21
	計	60
香川	東讃	22
	中讃	30
	西讃	10
	計	62
愛媛	東予	23
	中予	16
	南予	11
	謂南	8
	計	58
高知	土佐	30
	幡多	11
	計	41
福岡	北九州	10
	筑豊	9
	福岡	11
	筑後	13
	計	43
佐賀	佐賀東部	23
	佐賀西部	18
	唐津	6
	計	47
長崎	北部	3
	南部	37
	壱岐・対馬	5
	五島	5
	計	50
熊本	北部	25
	東部	6
	南部	12
	計	43
大分	国東	6
	北部	11
	南部	26
	西部	5
	佐伯	4
	計	52
宮崎	日向	33
	諸県	7
	計	40
鹿児島	薩隅	27
	離島	17
	計	44

1）　本稿の分析を行うにあたっては『講座方言学』（飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編）や『日本のことばシリーズ』（平山代表編）などの区画を参照し区画を設けた。ただし,『むかし話』資料は都道府県によってはむかし話の再録された地点が正確に分からないものがある。また，府県内での地域的な偏りがないよう収集されているものの，区画間で分析に支障が出ない分量が均等に収められていない場合もある。今後の分析では，区画を分けるべき／分けなくてもよい方言がある可能性があることに留意しつつ分析を進める必要がある。

4. 肯定文における存在動詞の分布

本節では『むかし話』資料にみられた存在動詞の分布のうち，肯定文の分布についてみる。分析の結果は表 2 および図 2 の通りである。

表 2　肯定文に現れた存在動詞

都府県	地域	存在動詞			
		アル	イル	オル	計
青森	津軽	9	30		39
	南部	3	12		15
	計	12	42		54
岩手	北部	1	5		6
	中部	13	15		28
	沿岸		3		3
	南部	3	7	1	11
	計	17	30	1	48
宮城	北部	12	22	1	35
	南部		10		10
	計	12	32	1	45
秋田	北部		3		3
	中央		10	1	11
	南部		10	1	11
	由利本荘		3	1	4
	計		26	3	29
山形	最上	2	5		7
	庄内		14	3	17
	村上		9		9
	置賜	1	4	2	7
	計	3	32	5	40
福島	会津	2	5		7
	中通り	3	17	3	23
	浜通り	1	6		7
	計	6	28	3	37
茨城	計	4	11		15
栃木	東部	1	6		7
	中部	1	6		7
	西部	1	16	2	19
	計	3	28	2	33
群馬	北・西部	7	6		13
	中部	1	10	4	15
	計	8	16	4	28
埼玉	計		11	5	16
千葉	下総	1	8	2	11
	安房・上総	2	10	8	20
	計	3	18	10	31
東京	計	4	20	5	29
神奈川	北部	2	5	2	9
	南部	1	14	1	16
	計	3	19	3	25

都府県	地域	存在動詞			
		アル	イル	オル	計
新潟	北越	6	5		11
	中越	5	8	2	15
	西越		2	1	3
	計	11	15	3	29
富山	呉東		5	13	18
	呉西		1	26	27
	五箇山			2	2
	計		6	41	47
石川	能登	1	2	14	17
	加賀	1		11	12
	計	2	2	25	29
福井	嶺北	4	25	4	33
	嶺南	1	9	8	18
	計	5	34	12	51
山梨	東部		2		2
	西部	2	12	2	16
	計	2	14	2	18
長野	北信	11	3	4	18
	東信	3	2	1	6
	中信	1	8	4	13
	南信	3		5	8
	計	18	13	14	45
岐阜	飛騨		1	10	11
	美濃	2	9	17	28
	計	2	10	27	39
静岡	東部		7	2	9
	中部		13		13
	西部	2	7	2	11
	計	2	27	4	33
愛知	三河			9	9
	尾張	2		9	11
	計	2		18	20
三重	伊勢	2	5	5	12
	伊賀		2	3	5
	志摩			2	2
	牟婁		1	4	5
	計	2	8	14	24

都府県	地域	存在動詞			
		アル	イル	オル	計
滋賀	湖北		8	3	11
	湖東		10	1	11
	湖西	1	7	3	11
	湖南		8	2	10
	計	1	33	9	43
京都	京・山城	3	6	2	11
	丹波		5	3	8
	丹後	1	1	7	9
	計	4	12	12	28
大阪	大阪市・摂津		10	3	13
	河内	1	10	5	16
	泉北・泉南	2	2	6	10
	計	3	22	14	39
奈良	北和		8	3	11
	南和	1	2	15	18
	計	1	10	18	29
兵庫	但馬	2	1	6	9
	播磨		4	13	17
	丹波		1	2	3
	阪神神戸		2	1	3
	淡路島	2		6	8
	計	4	8	28	40
和歌山	紀北	2	7		9
	紀中		5	1	6
	紀南	1	9	2	12
	計	3	21	3	27
鳥取	因幡	8		13	21
	東伯耆	6		4	10
	西伯耆	1		11	12
	計	15		28	43
島根	出雲	1	1	31	33
	石見	1		9	10
	隠岐			7	7
	計	2	1	47	50
岡山	備前	1		11	12
	備中			29	29
	美作		2	6	8
	計	1	2	46	49
広島	備後		8		8
	安芸	4	19	7	30
	計	4	27	7	38
山口	周防	1	8	5	14
	長門		6	7	13
	計	1	14	12	27

都府県	地域	存在動詞			
		アル	イル	オル	計
徳島	北東部	3	2	13	18
	西部		4	1	5
	南部	2	3	7	12
	計	5	9	21	35
香川	東讃	1	1	18	20
	中讃	1		19	20
	西讃		1	4	5
	計	2	2	41	45
愛媛	東予		4	14	18
	中予		1	11	12
	南予	1		12	13
	謂南		2	6	8
	計	1	7	43	51
高知	土佐	1	1	29	31
	幡多		1	10	11
	計	1	2	39	42
福岡	北九州			5	5
	筑豊		1	2	3
	福岡	2	8	3	13
	筑後		5	7	12
	計	2	14	17	33
佐賀	佐賀東部		2	11	13
	佐賀西部		4	24	28
	唐津			1	1
	計		6	36	42
長崎	北部			2	2
	南部	3	1	19	23
	壱岐・対馬	1		5	6
	五島			3	3
	計	4	1	29	34
熊本	北部	1	15	12	28
	東部	2	5		7
	南部	1	5	5	11
	計	4	25	17	46
大分	国東	1		6	7
	北部		3	7	10
	南部	2	2	34	38
	西部			4	4
	佐伯			3	3
	計	3	5	54	62
宮崎	日向		10	24	34
	諸県		4	1	5
	計		14	25	39
鹿児島	薩隅			14	14
	離島		4	8	12
	計		4	22	26

表 2 および図 2 の結果から，各方言で主に使用されるのは東＝イル，西＝オルであることが確認できる。一方，各形式専用の方言はほとんどみられず，イル 7 方言（岩手沿岸・宮城南部・秋田北部・村上・山梨東部・静岡中部・備後），オル 12 方言（五箇山・三河・志摩・隠岐・備中・北九州・唐津・長崎北部・五島・大分西部・佐伯・薩隅）で，アルのみが現れる方言はなかった。

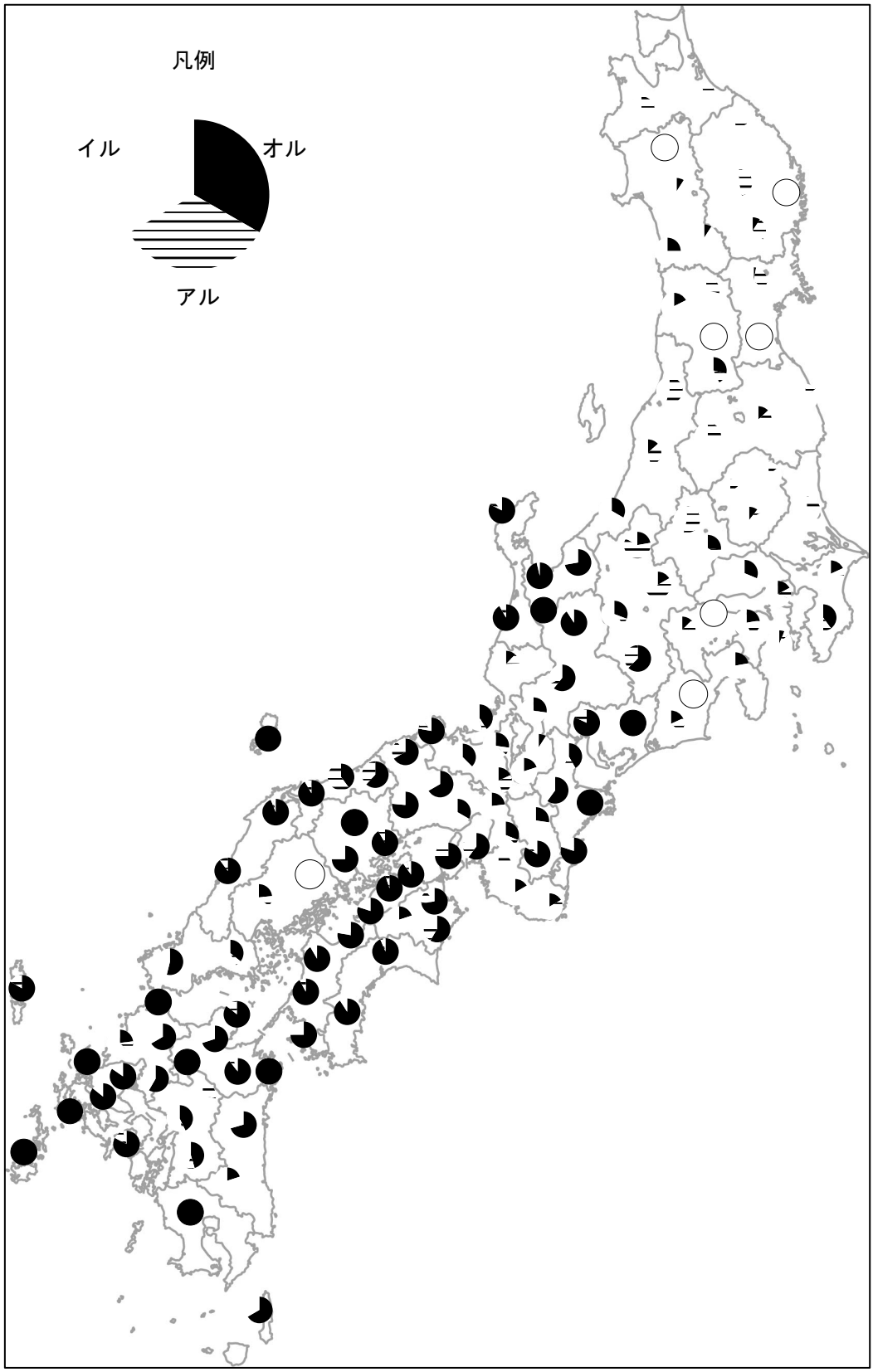

図 2　『むかし話』資料に現れたアル・イル・オルの分布（肯定）

イル・オル専用地域を除く方言で，イルが現れなかった方言（＝アル・オル併用の方言）は 13 方言（加賀／南信／尾張／淡路島／因幡／東伯耆／西伯耆／石見／備前／中讃／南予／壱岐／対馬／国東），オルが現れなかった方言（＝アル・イル併用の方言）は 13 方言（津軽／青森南部／岩手北部，中部／最上／会津／浜通り／栃木東部，中部／群馬北／西部／北越／紀北／熊本東部）であった。すなわち，イルまたはオルを専用するというわけではないが，主に使用する存在動詞がどちらかという点でも東西対立が認められる。

このような東西対立が確認できるうちのオル専用・主流方言において，関西・広島・山口・熊本ではイルの使用が目立つ。これらのうち，関西については「有生物主語の限量的存在文の「いる」は一貫して増加する傾向」にあるという金水（2006）の指摘と合致するとみてよいであろう。その他の方言におけるイルの出現率は資料によるものと考えられる。すなわち，『むかし話』資料でおける広島・山口・熊本の資料は，他方言とは異なり丁寧語を用いた語りが多くを占め，共通語的な言語使用となっている。そのためオルが主流の西日本にあってイルの出現率が高くなっていると思われる[2)]。

(1) 宮島の弥山には太郎坊といわれる「はな高天狗」と，次郎坊という「からす天狗」が**いました**。 【狗賓さん : 広島（安芸）】

(2)「あんたらー，馬取やかんねのほうにも貝はよーけ**おる**けんど，生野島の向こうべらの，契の前に大きな磯があって，そこへ行くといろいろ大きな貝がいっぱい**おる**んじゃそうな。そこへ一ぺん行ってみようや。」
【八人ぞわのお話 : 広島（安芸）】

(3) どうやら，まわりには，たくさんの人々が**いる**らしく，小声でささやきかわす話し声が聞こえてきました。 【耳なし芳一 : 山口（長門）】

(4)「きれいな海だなぁ。今日はよいことがあるような気がする。おぉ，あそこにきれいなむすめが**いる**ぞ。」 【おぬかれごすん : 山口（周防）】

(5) むかし，木山の町に木山弾正という殿様が**いました**。その殿様の家来に宮園兵部という若者が**いました**。 【寄姫の滝 : 熊本（東部）】[3)]

(6)「八つ目の化けもん？そんなやつが**おる**もんかい。」
【赤岩んぶちの八つ目 : 熊本（北部）】

---

2) この 3 県のイル・オルの出現状況は，地の文と会話文で異なり。広島・熊本では地の文ではイルの出現数が多い一方で，会話文ではオルの出現数の方が高く，山口でのみ地の文・会話文ともにイルの出現数がオルを上回っていた。
広島（イル＝23:4，オル＝3:4），山口（イル＝12:2，オル＝8:4）
熊本（イル＝23:2，オル＝11:6） （形式＝地の文 : 会話文）

3) 以下，引用する例文の出典を【話の題 : 府県（府県下の地域）】の形で用例の末尾に示す。また，分析対象の存在動詞をゴシック体で示す。

ところで，『むかし話』資料にみられる存在動詞の半数以上は，語り冒頭の開始部に現れる[4]（1945 例中，開始部 : 975 例）。この 975 例のうち，イル（東 230 例 : 西 142 例）とオル（東 82 例 : 西 382 例）の出現傾向はデータ全体のときと同じく東西の偏りがあるが，アルは東に多く現れた（東 95 例 : 西 36 例）[5]。

（7）むかし，あるところに，じいさまとばあさまと**あった**どさ。

【瓜子姫っこ : 岩手（中部）】

（8）むかし，あるところに，おじいさんとおばあさんが**あった**って。

【ツルの恩返し : 長野（南信）】

（9）とんとんむかしになあ，おじいさんと，おばあさんが**あった**そうななあ。

【地蔵さんの鼻の穴 : 鳥取（因幡）】

語りの開始部冒頭に現れる存在文は限量的存在文のうちの初出導入文にあたる（金水 2006）。表 3 に示した金水（2006）による空間的存在文（所在文（10）・生死文（11）・実在文（12）・眼前描写文（13））と限量的存在文（部分集合文（14）・初出導入文（15）・疑似限量的存在文（16））の歴史的変化を踏まえると，西より東に古い使い分けの状況が保たれていると言うことが出来よう（先に触れた広島・山口・熊本は，丁寧語が使用されているという点以外にこの点においても共通語的であることが確認できる）[6]。

表 3　有生物主語における存在動詞の歴史的変化（金水 2006 : 108-109 をもとに作成）

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">空間的存在文</th><th colspan="2">限量的存在文</th></tr>
<tr><td>第一段階</td><td colspan="4">あり</td></tr>
<tr><td>第二段階</td><td>いる</td><td colspan="3">ある</td></tr>
<tr><td>第三段階</td><td colspan="2">いる</td><td colspan="2">ある</td></tr>
<tr><td>第四段階</td><td colspan="3">いる</td><td>ある</td></tr>
<tr><td>第五段階</td><td colspan="4">いる</td></tr>
</table>

（10）お父さんは（{会社／アメリカ／どこか} に）いる。

（11）お父さんはもういません。

（12）{ペガサス／シャーロック・ホームズ／神様／幽霊／宇宙人} はいます（いません）。

4）話に登場する人物や背景説明にあたる部分を〈開始部〉，開始部で導入した人物を取り巻く物語が展開する部分を〈主要部〉，物語の結末を述べる部分を〈終了部〉に分けて分析した。

5）ここでの「東西」は表 2 および図 2 の結果から，富山・岐阜・愛知以西を西として集計している。また東の 95 例のうち東北方言での用例が約半数を占める（東北 43 例，関東 25 例，中部 27 例）。

6）（10）～（16）の例文は金水（2006）による。

（13）あ，子供が｛いる／*ある｝。

（14）最近は，教科書以外の本は一冊も読まない学生が｛いる／ある｝。

（15）昔，ある山奥の村に，太郎という男の子が｛いた／あった｝。

（16）昔，太郎という男の子がある山奥の村に｛いた／*あった｝。

なお，西日本方言のうちアルが用いられる方言として知られる和歌山方言におけるアルの使用は，すべて限量的存在文であった（開始部の用例は（17）のみ）。

（17）ずっとむかし，勘平さんというて，そりゃあ変わり者の大工さんが**あった**んやとい。【寺大工勘平：和歌山（紀北）】

（18）タヌキでもキツネでも人をだまくらかすけど，だまされやすい人とだまされにくい人と**ある**らしいなあ。【平石ダヌキ：和歌山（紀南）】

（19）菜の花のさいているしげみの中へ，こそこそとすがたをかくした者が**あった**んや。【綿打ち勘松つぁん：和歌山（紀北）】

また，主要部におけるアルは，限量的存在文（所有文）での使用が目立った。

（20）「おまえさん，娘が三人**あった**な。どうしてもたんぼに水が欲しかったら，わしにひとりくんねえか。そうしたら，おまえさんげのたんぼに水をいっぺえにいれてやっぺえ。」【糸くり川のカッパ：茨城】

（21）「だれかー，この田なぼに水かけてくったら，むすめっこ三人**ある**うち，どれでもひとりくれようがのんー。」【サルのよめご：新潟（北越）】

（22）この中将さまには，四人の男のお子さんが**あって**な。【鉢かづき姫：大阪（河内）】

（23）「この畑うってごすむんが，ありゃなあ。うちにゃあ，三人の女の子が**ある**け，ひとりよめにやるに。」【親孝行なむすめ：鳥取（東伯耆）】

（24）詩を作ってくれたお友だちもありましたし，海の神八大竜王の歌を歌って，無事に日本へ帰れるように祈ってくれるお友だちも**ありました**。【海を走るウサギ：福岡（福岡）】

さいごに，東に現れたオルの例について触れておく。出現数 72 例のうち開始部 55 例主要部 17 例であるが，存在文の種類による使い分けや，開始部・主要部・終了部といった語りの話段による分布の傾向，敬語接辞が標準語形か方言形か[7] といった共起する接辞との関連など，現段階の分析では何らかの規則性はみられない。

（25）むかし，山のふもとの小さな村に，じんじとばんばが**おった**と。【竜宮のおくりもの：宮城（北部）】

7） 否定辞と同様に共起できる形式に制限・傾向がある。
【ラレル】*イラレル（イル＋ラレル）／オラレル（オル＋ラレル）
【ハル】イ（ヤ）ハル（イル＋（ヤ）ハル）／オリハル（オル＋ハル）
【ナル】*インナル（イル＋ナル）／オンナル・オイナル（オル＋ナル）
【ラス】*イラス(イル＋ラス)／オラス（オル＋ラス）

(26) あるところに，とどと三人の娘こが**おった**ど。【うばっ皮の嫁：秋田（南部）】

(27) ある山ん中に，びんぼうな金蔵という男が**おった**けど。

【ツル女房：山形（置賜）】

(28) むかし，むかし，庄兵衛という名主が**おった**と。

【子どもずきな地蔵さま：福島（中通り）】

(29) あるところに，そりゃあ気だてのいい馬方が**おった**んだと。

【観音さまがくれたおよめさん：栃木（西部）】

(30) むかーし，赤城の山に，たいした鬼が**おった**んだと。

【赤城のへっぷり鬼：群馬（中部）】

(31) 豆木法印という，おぼうさまが**おった**と。【豆木法印：埼玉】

(32) むかし，むかしのことだがな，銚子の垣根というところに，さかなとりの名人が**おった**そうな。【垣根の長者：千葉（下総）】

(33) むかし，むかし，犬の大すきな将軍さまが**おった**。【ネコかきや：東京】

(34) むかし，あるところにたいそう美しいひとりのむすめが**おりました**。

【播磨糸長：神奈川（北部）】

(35) むかし，東伊豆のある茶店に，とてもかわいらしいむすめが**おった**。

【手なしむすめ：静岡（東部）】

(37) ここに大むかしから，そりゃあ深い深いでかいほらあながあってな，そこにありがてえお主さまが**おらっしゃった**と。【ほらあなの主：長野（南信）】

5. 否定文に現れた存在表現の分布

つぎに，否定文に現れた存在動詞の分布を示すと図 3 および表 4 の通りである。

否定文は肯定文に比べて出現数が少ないので，今回の結果をもって各方言の特徴とすることは避けなければならないかもしれず，今後さらなる検討を要する。このことに留意しながら今回の結果をみると，次のことが指摘できる。

(38) a. 肯定文と同様に東でイル，西でオルが主に用いられるといった東西対立の分布となる。

b. 西日本のうち，肯定文ではオルが現れるが，否定文では現れなかった方言が一定数ある（34 方言／103 方言）。

c. 肯定文でイルが現れないが否定文では現れるといった出現状況の方言もある（志摩）。

d. 否定文では肯定文に比べてナイ（アル）の出現率が高くなる方言がある。

(38) b の 34 方言は，岩手南部／宮城北部／由利本荘／庄内／置賜／栃木西部／群馬中部／下総／安房・上総／神奈川北部／神奈川南部／新潟中越／西越／山梨西部／北信／東信／中信／静岡東部／静岡西部／志摩／湖東／湖西／湖南／京・山城／丹波／北和／南和／播磨／因幡／東伯耆／周防／長門／筑豊／福岡，となる。これらのうち，肯

定文でオル主流方言であった西日本方言の 15 方言が含まれることが注目される。

(39) ちゅうて，戸をあけたけんど，あたりには，だあれも**いやへん**のやて。

【ままこいじめ：滋賀（湖西）】

(40) なん人かの人に蛸を見られているのに，だれひとりとしてとがめる人が**いやはらへん**のや。 【蛸薬師：京都（京・山城）】

表 4　否定文に現れた存在表現

都府県	地域	存在動詞 ナイ	イル	オル	計
青森	津軽		5		5
	南部	1	1		2
	計	1	6		7
岩手	北部		3		3
	中部		3		3
	沿岸				0
	南部		1		1
	計		7		7
宮城	北部		1		1
	南部				0
	計		1		1
秋田	北部				0
	中央		1		1
	南部		1		1
	由利本荘		2		2
	計		4		4
山形	最上		3		3
	庄内		2		2
	村上				0
	置賜		5		5
	計		10		10
福島	会津				0
	中通り		2	1	3
	浜通り		1		1
	計		3	1	4
茨城	計		7		7
栃木	東部		1		1
	中部				0
	西部		3		3
	計		4		4
群馬	北・西部		6		6
	中部		2		2
	計		8		8
埼玉	計		4	1	5
千葉	下総		2		2
	安房・上総	1	7		8
	計	1	9		10
東京	計		2	6	8
神奈川	北部		3		3
	南部	1	2		3
	計	1	5		6

都府県	地域	存在動詞 ナイ	イル	オル	計
新潟	北越		2		2
	中越		2		2
	西越		1		1
	計		5		5
富山	呉東			1	1
	呉西	1	1	3	5
	五箇山				0
	計	1	1	4	6
石川	能登			2	2
	加賀			4	4
	計			6	6
福井	嶺北		3	1	4
	嶺南			3	3
	計		3	4	7
山梨	東部		1		1
	西部	1	3		4
	計	1	4		5
長野	北信		3		3
	東信		2		2
	中信		1		1
	南信	1	1	4	6
	計	1	7	4	12
岐阜	飛騨			1	1
	美濃	1	1	2	4
	計	1	1	3	5
静岡	東部		1		1
	中部		2		2
	西部		3		3
	計		6		6
愛知	三河				0
	尾張			1	1
	計			1	1
三重	伊勢			1	1
	伊賀				0
	志摩		1		1
	牟婁				0
	計		1	1	2

都府県	地域	存在動詞 ナイ	イル	オル	計
滋賀	湖北				0
	湖東		1		1
	湖西		3		3
	湖南		1		1
	計		5		5
京都	京・山城		1		1
	丹波		1		1
	丹後				0
	計		2		2
大阪	大阪市・摂津	1		1	2
	河内			1	1
	泉北・泉南		2	1	3
	計	1	2	3	6
奈良	北和	1	1		2
	南和		1		1
	計	1	2		3
兵庫	但馬			1	1
	播磨		1		1
	丹波			1	1
	阪神神戸				0
	淡路島			2	2
	計		1	4	5
和歌山	紀北		2	1	3
	紀中			1	1
	紀南				0
	計		2	2	4
鳥取	因幡	1			1
	東伯耆	1			1
	西伯耆			1	1
	計	2		1	3
島根	出雲			1	1
	石見			1	1
	隠岐				0
	計			2	2
岡山	備前	3		1	4
	備中			9	9
	美作			1	1
	計	3		11	14
広島	備後		7	1	8
	安芸	6	3	2	11
	計	6	10	3	19
山口	周防		3		3
	長門	3	3		6
	計	3	6		9

都府県	地域	存在動詞 ナイ	イル	オル	計
徳島	北東部			2	2
	西部				0
	南部			3	3
	計			5	5
香川	東讃			4	4
	中讃			7	7
	西讃			3	3
	計			14	14
愛媛	東予			2	2
	中予		1	2	3
	南予			1	1
	謂南				0
	計		1	5	6
高知	土佐			1	1
	幡多				0
	計			1	1
福岡	北九州			1	1
	筑豊		3		3
	福岡		3		3
	筑後	2		1	3
	計	2	6	2	10
佐賀	佐賀東部			5	5
	佐賀西部	1		6	7
	唐津				0
	計	1		11	12
長崎	北部				0
	南部			7	7
	壱岐・対馬				0
	五島				0
	計			7	7
熊本	北部		6	3	9
	東部		1		1
	南部		5	1	6
	計		12	4	16
大分	国東				0
	北部			2	2
	南部			6	6
	西部			4	4
	佐伯			2	2
	計			14	14
宮崎	日向		1	1	2
	諸県		1	1	2
	計		2	2	4
鹿児島	薩隅		1	4	5
	離島		7	3	10
	計		8	7	15

また，これらの方言のうち，志摩においては，肯定文でオルのみしか出現しなかったのに対して，否定文ではイルのみであった（(38) c)。

(41) だれかに助けてもらおうと思ってあたりを見まわたしたが，だれも**いない**。

【カッパの小法師石：三重（志摩)】

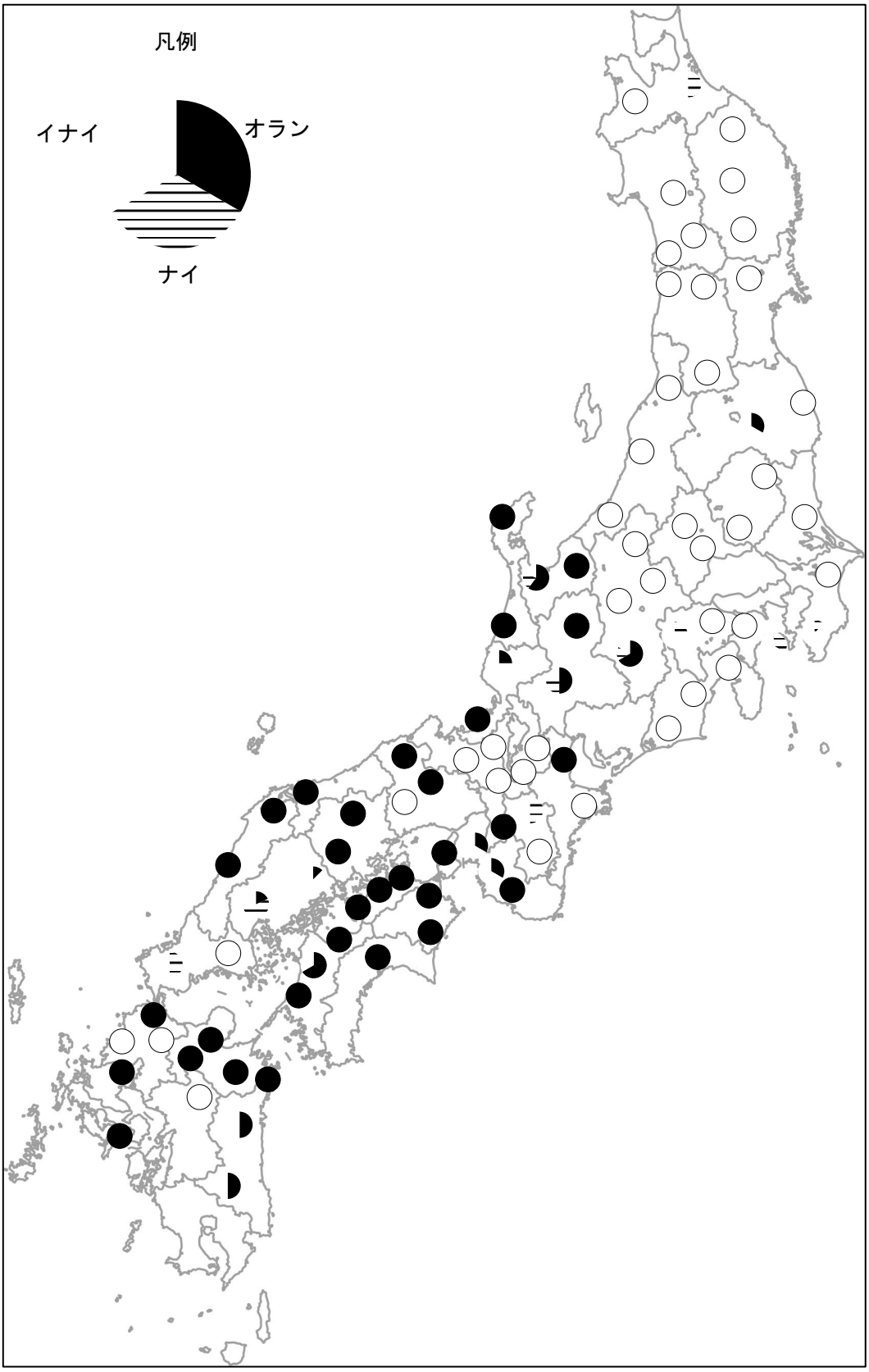

図 3　『むかし話』資料に現れたアル・イル・オルの分布（否定）

なお，東伯耆・長門・周防の用例はすべて丁寧体のものであり，このことが肯定文に比べてナイ（アル）の出現率が高くなった要因であるとも考えられる。

（42）（前略）灰でなわをなうって，どがにしたもんだらあか，だれも，それをするもんが**ありません**。【うばすて（二）灰のなわ：鳥取（東伯耆）】

（43）でも，だれひとり自分の家からとか，わたしがとかいう者は**いないのです**。【鶴島の悲話：山口（長門）】

（44）それからというものは，えんこうの姿を見たものは，だれひとりとして**いませんでした**。【えんこう岩：山口（長門）】

（45）その男がどこから来たのか，知っているものは，だれひとりとして**いませんでした**。【柳の森：山口（周防）】

上記のほかに，特徴的な例としては次のものがあったことを最後に挙げておく。

（46）妖怪のうわさを聞いて，（中略）もやもやと夕やみがおとずれるころは，ネコの子いっぴきと**おらなくなってしまう**。【クモの井戸：東京】

6. まとめと今後の課題

本稿では『むかし話』資料を用いて存在動詞の使用状況についてみた結果，次のことを確認した。

（A）肯定文における存在動詞の出現傾向は，従来の研究で明らかにされていた東西対立の分布と一致した。すなわち，富山・岐阜・愛知を東端として東日本でイルが，西日本でオルが主に用いられるという分布である。

（B）物語の開始部で用いられる存在動詞のうち，アルの出現は東日本に偏る。

（C）否定文における存在動詞の出現傾向も肯定文と同様の傾向が確認できる。

肯定文における出現例についてはこれまでの研究と同じく東西対立の分布となることが確認できた（A）。また，歴史的には限量的存在文でのアルは，イルないしオルに置き換わってきていることが明らかにされているが，西日本方言の方がその傾向にあることを明らかにした（B）。

一方，東日本に現れたオルについて，その規則性や要因の詳細に関するところまでは本稿では考察が及ばなかった。また，否定文における存在動詞についても（C）のほか特徴的な例について確認したのみで今後のさらなる分析が課題として残される。くわえて，各方言内での存在文のタイプごとに肯定文と否定文でいずれの形式が用いられ，どのような体系が確認できるのかを明らかにした上で，歴史的変化と地理的分布がどのように対応付けられるのかといったことも考える必要があろう。さらに，存在動詞からの文法化によって作られたアスペクト形式までを含めたとき，本稿および先述の課題に関する分析で得られた結果がどのような意味を持つようになるのかも見えてくると思われる。

本稿で用いた『むかし話』資料は，日高（2020）で紹介されているように「「日常言

語の再現度」の高い資料」であるが，資料上の特徴は考慮に入れて分析を進めていかなければならない。『むかし話』資料の用例自体のより詳細な分析に加えて，他の談話資料や面接調査資料を合わせた調査・分析が必要であると考えている。方言内での体系を整理しつつ，その分布の様相を明らかにし，歴史的変化に関する研究成果を踏まえた分析を進めることを今後の課題としたい。

【付記】本発表は，JSPS 科研費 26244024 および 20H00015，19K20788，20K13047 の成果の一部である。

参考文献

金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.

小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房.

迫野虔徳（1998）『文献方言史研究』精文堂出版.

酒井雅史（2019）「関西方言における素材待遇形式の分布―読みがたり昔ばなし資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』31，pp.1-15，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

佐藤亮一 監修（2002）『お国ことばを知る　方言の地図帳』小学館.

竹田晃子（2020）『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房.

野間純平（2014）「近畿方言におけるネン・テンの成立―昔話資料を手がかりに―」『阪大日本語研究』26，pp.51-69，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

日高水穂（2013）「「昔語り」に現れる文末表現の地理的分布」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析　成果報告書　－言語地図と方言談話資料－』pp.13-32，国立国語研究所.

――――（2018）「昔話の談話構造と表現形式にみる地域性」『國學院雑誌』119-11，pp.217-230，國學院大學文学部資料室.

――――（2020）「昔話資料を用いた方言研究」『日本方言研究会　方言研究支援プロジェクト』http://dialectology-jp.org/wiki.cgi?page=%CA%FD%B8%C0%B8%A6%B5%E6%BB%D9%B1%E7%A5%D7%A5%ED%A5%B8%A5%A7%A5%AF%A5%C8

（文学部　講師）